

**注意！**

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意下さい。

# 農作物技術情報 第3号 花き

発行日 平成22年 5月27日  
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部  
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4435)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます  
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

**今後2週間程度低温が予想されています。以下に留意して農作物の管理に努めましょう。**

- 【りんどう】畦間かん水や、生育に応じた追肥により生育の確保に努めましょう。定植は、天候を見ながら早めに計画的に進めましょう。病害虫防除では、葉枯病が多雨により多発しますので予防散布を徹底するとともに、リンドウホソハマキ、ハダニ類の適期防除に努めましょう。
- 【小ぎく】摘心後の整枝を遅れないように行い、圃場の乾燥に留意し、必要に応じてかん水、追肥を行いましょ。病害虫防除では曇天、降雨が続く場合には、特に白さび病の発生に注意しましょう。

- ◆ りんどう 土壌水分管理、雑草防除を適正に行いましょう
- ◆ 小ぎく 定植、整枝などの作業を計画的に行いましょう
- ◆ トルコギキョウ 生育初期の水分・温度管理を適切に行いましょう

## 1 りんどう

### (1) 生育概要

本年は5月前半までの気温が低めに推移し、草丈は短く、遅れぎみの生育となっております。病害虫では、リンドウホソハマキ、ハダニ類やハモグリバエ類の発生がみられますが、例年の比べ発生は遅く少なめとなっております。また、生育が旺盛な時期となり、一部では葉先枯れ症状の発生が見られています。

育苗は、天候不順が続きましたが、生育は概ね順調に進み、5月末から定植が始められる見込みです。

### (2) 圃場管理

5月下旬から6月は茎の伸長量が大きく、また花芽の分化の時期となります。水分を多く吸収するとともに、肥料成分も土壌水分があることで吸収されるので、降雨が少ない場合は必ずかん水を行います。ただし、高温時にかん水を行うと根に障害が発生して地上部まで影響を及ぼすことがあるので、夜間または気温の低い日を選んで行いましょう。また、圃場に数日以上以上の長期間水をためておくことも避けてください。

ほ場の乾燥は葉先枯れ症状の発生を助長します。発生しやすい圃場では、かん水の徹底と石灰資材の葉面散布で発生を抑えましょう。

圃場内や周辺の雑草はハダニ類やアザミウマ類の繁殖源となるので、放置することのないよう早めに処理します。畦畔の草刈りや通路の除草を早めに行いましょう。除草剤を使用する際には、飛散により、りんどうにかからないように留意し、また、登録や使用方法も確認して使用します。

### (3) 施肥管理

基肥としてりんどう専用肥料を用いた場合、追肥施用時期は側芽発生期(葉の付け根に小さく腋芽が見える頃)前です。北上市付近における側芽発生期は早生種で6月上旬、晩生種で6月下

旬ですので、この時期までに数回に分けて施用してください。葉色や葉の大きさ、草丈などで判断し、過剰にならないよう留意してください。

#### (4) 定植

天候を見ながら早めに計画的に作業を進めましょう。堆肥はできるだけ早く施用して碎土し、その後基肥を施用し床作り、マルチ張りを行います。

また、「りんどう定植2年肥料」として、2年目まで肥料成分がゆっくり溶け出す緩効性肥料を使用した定植が行われるようになりました。基本的には2年目の施肥が不要となり、施肥作業の省力化になりますが、土壌条件等によっては、2年目の春に肥料の過不足が見られる場合がありますので、生育状況をよく観察して管理してください。

定植は苗が老化しないうちに早めに実施します。定植作業は苗の萎れを防ぐため曇天、無風時が理想的ですが、晴れた日に行う場合は、トレーが高温にならないように扱い、またトレーから取り出して根が乾燥しないように植えつけ直前にトレーから取り出すように注意します。

表 りんどう定植ほ場施肥量例 (10 a あたり)

施肥例 1	肥料銘柄	資材分量	現物施肥量
	りんどう専用肥料	窒素 15  磷 16  加里 15	60～80kg
	苦土重焼磷	く溶性 35%  水溶性 16%	30kg
施肥例 2	肥料銘柄	資材分量	現物施肥量
	りんどう一本勝負	窒素 15  磷 10  加里 15	60～80kg
	苦土重焼磷	く溶性 35%  水溶性 16%	40kg
施肥例 3	肥料銘柄	資材分量	現物施肥量
	りんどう定植2年肥料	窒素 15  磷 10  加里 10	180～150kg
	苦土重焼磷	く溶性 35%  水溶性 16%	40kg～0kg

苗にジベレリン処理を行った場合は、処理後、早めに（数日以内）定植してください。また、定植後は薄めの液肥、または水をかん注し、床土と苗をなじませます。定植後は活着や初期生育を促進するため乾燥しないように管理します。

#### (5) 病虫害防除

##### ア 葉枯病

現在のところ発生は少ないですが、薬剤散布で生育初期からの予防を徹底しましょう。下葉に感染していたものが降雨により順次上位葉に拡大するので、定期的な薬剤散布による拡大防止に努めてください。

##### イ リンドウホソハマキ

今年は低めの気温経過により羽化は平年並みからやや遅めとなり、防除適期は県中部以南では6月上旬、冷涼地では6月中旬と見込まれます。該当時期の防除の徹底とともに、潜葉痕や茎頂部の食害が見られたならば防除を徹底します。また、発生状況は病虫害防除所の「病虫害防除速報」等を参考にしてください。

## ウ ハダニ類

ハウス促成栽培では例年並みの発生が見られています。また、露地でも5月中旬に発生が確認されています。ハダニは高温・乾燥条件で増殖しますので、今後の気象経過に留意するとともに、下位の葉裏の寄生状況を観察し、発生を見たら早めに薬剤散布を行って防除してください。増殖源となる圃場周辺の雑草防除も併せて行います。ダニ剤の使用にあたっては、同一系統剤の年1回使用を徹底して、抵抗性が生じないように十分留意してください。散布時は、十分な散布量で、葉の裏側を洗うように散布すると効果的です。

## 2 小ぎく

### (1) 生育概況

8月咲き品種については、苗の生育遅れと圃場準備の遅れにより、全般的に定植が遅れました。定植後、摘心を終えた後も低温の影響により側枝の伸長が緩慢となり、開花時の草丈不足が懸念される場所です。病虫害では、育苗ハウスでの白さび、べと病の発生、露地ではハモグリバエ類の発生が散見されます。

9月咲き品種の育苗はおおむね順調で、これから、本格的な定植が始まる見込みです。

### (2) 定植後の管理

8月咲品種では、草丈不足が心配されますので、初期生育を確保するために水分不足にならないよう注意し、必要に応じてかん水を行いましょ。追肥は一般には不要ですが、伸びが悪い場合、葉色が薄い場合などは少量の追肥（液肥）も効果的です。

摘心後に伸びた側枝は必ず3～4本に整理して品質確保を図ります。この時強い枝から残すのではなく、揃った枝を残すようにします。仕立て本数は品種特性に応じて変更します。

無マルチ栽培の場合は、土寄せを行い生育の促進を図ります。側枝が10cm程度伸びた頃と、整枝を行ったあとの2回が実施時期の目安です。ただし、土寄せにより開花が遅れる場合もあるので留意してください。

### (3) 病虫害防除

#### ア 害虫

アブラムシ類、アザミウマ類、ハダニ類、ハモグリバエ類などが問題となります。発生状況の観察に努め、早期防除に努めます。併せて増殖源となる雑草防除も行います。

#### イ 白さび病

キク栽培で、特に重要な病害です。定期的な薬剤散布で予防します。新葉の展開に合わせて5～7日間隔で散布することが基本ですが、降雨が続く場合などは散布間隔を狭めます。薬剤の選定は各地域の防除暦等を参考にしてください。



白さび病  
葉の表の状態



白さび病  
葉の裏の状態

図 小ぎくの白さび病

## ウ ウイルス病

ミカンキイロアザミウマ等が媒介する TSWV（トマト黄化えそウイルス）の感染による「キクえそ病」が県内でも確認されていますので、疑いがある場合は普及センターに相談してください。ウイルス以外の要因で類似の症状が発生する場合もあるので、慎重に判断してください。罹病株の抜き捨て、アザミウマ類の防除を徹底し被害拡大を防止しましょう。

キクに発生するわい化病（キクわい化ウイルス）、キクえそ病（TSWV）に感染した株は回復することがありません。圃場に残すことで他への伝染源となるので、見つけ次第抜き捨てることを徹底してください。

### （４） 9月咲き品種

定植期は5月下旬～6月上旬となりますが、丈の伸びやすい品種は遅めに定植するなど品種特性に応じた定植期としてください。県北地域では品種によっては、慣行定植日より10～30日遅らせることで過剰な伸張の抑制と草姿の改善が図られる試験成果が出されていますので、参考にしてください。

現在育苗中のものは高温による障害に注意してください。

## 3 その他

### （１） トルコギキョウ

5月は種で夜冷短日育苗と定植後30日間の短日処理を組み合わせることでロゼット化や短茎開花を回避し、10～11月の出荷が可能となります。本県では8～9月出荷作型に集中する傾向があるので、新たな作型の導入を進め、有利販売を図りましょう。

夏切り作型の定植後の栽培管理は、曇天が続く場合は施設内の遮光資材や内部カーテンを開け、日射量を確保するよう管理しましょう。日照不足は品質低下や場合によってはロゼット化の原因となります。また、施設内の温度にも敏感に反応するので、適温管理に努めましょう。

### （２） ユリ類

抑制作型では遮光等により施設内の温度低下を図りますが、品質低下を防ぐために日照をできるだけ確保することと、土壤水分を維持することが求められます。温度上昇を防ぐ遮光資材は、遮光率の高い資材の使用を避け日照確保に努めます。施設の換気に努め、茎の軟弱化を防ぎます。一方で天候が不順な場合は日照を確保するよう遮光資材を開放しましょう。

### （３） アルストロメリア

葉芽や枯れ茎は適宜間引きますが、間引きが強すぎるとその後発生する芽が細くなるので注意します。高温期の過剰なかん水や施肥は根の障害を招くことがあるので注意します。かん水を少なくしたい品種もあるので、品種特性に応じた管理とします。

**春の農作業安全月間実施中！**

**急ぐより 家族の笑顔を大切に想う心で ゆとりの仕事**

**6月1日～8月31日は  
農薬危被害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう。
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう。
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

次号は6月26日（金）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。